農と食のコラム

基本を尊ぶ

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一—

蔦谷 栄一（つたや えいいち）

〔主な経歴〕

東北大学経済学部卒業、1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表

〔主な著書〕

「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）など

秋たけなわである。主宰する子どもの田舎体験教室でのブドウ狩りと稲刈りを、今年も9月の最終土日に終えた。稲刈りをしたのは、6月1日に田植えをした1反ほどの田んぼで、「分けつ」して大きく成長し、黄金色になって頭を垂れる稲穂を刈り取った。

田んぼは山梨県東部に位置する大菩薩峠のふもとで、甲府盆地の東端にある塩山市街（現甲州市）から青梅街道を北上して15分ほどの傾斜地にある。青梅街道沿いの傾斜地の多くは桃畑となっているが、川に近いところは部分的ながら棚田が集積している。その一画にある棚田を利用して田植えや稲刈りをさせていただいている。

これらの棚田の雑草取りや水の管理等、日常的に管理しているのは、H氏を中心としたお年寄りたちである。ここもご多分に漏れず担い手は減るばかりで、桃畑に比べて棚田の遊休化が著しかった。こうした中でH氏は稲作を続けてきたが、H氏の周りには少しずつお年寄りたちが集まって、一緒に農作業や食事をするようになってきた。そこで棚田に囲まれた一画に「洗心道場」なる集会場兼囲炉裏を囲んで食事ができる大きな小屋を建て、組織的な活動も行うようになってきた。その一環として田植えや稲刈りを体験できる場を子どもたちや一般市民に提供している。こうした日には、お年寄りたちが農作業を教える一方で、別のお年寄りたちはここで収穫した黒米も含めたお米を使ってのおにぎりやほうとうを作って振る舞ってくれる。

ここはお年寄りたちの活躍の場、お年寄りたちが主役であるとともに、子どもたちに大事なものを伝える場でもある。こうした活動を積み重ねる中で、遊休化した農地が集まるようになり、結果的に規模拡大が続いてきた。水田が主ではあるが一部は畑にしており、さまざまな種類の農作物を栽培すると同時に、新たな技術的試みにも挑戦している。

H氏という80歳過ぎの人物の人間的魅力がこうした展開を可能にしているのであるが、その心持ちを受け継いで育ってきたご自身の息子たちへの世代交代も進みつつある。H氏の口癖は「自分は何もしない。みんな他人がやってくれる」である。その心は「自分のためでなく、他人のためにする」ところにある。子どもたちには作業を始める前に「これは仕事だよ。遊びではないからな」と説く。

「世間は補助金をもらってやるのが賢いとする。いいのは補助金があるうちだけ。なくなればつぶれる」「金は必要だが、その使い方が間違っている」。そして「今や人間は自然界から相手にされなくなってしまっている」「物を教える人には本質は分からない（えてして本質をわきまえずに教える人が少なくない、の意）」。H氏の話は耳が痛いことばかりだ。

洗心道場の正面には「基本を尊ぶ」と書かれた板書が掲げられている。ここに足を運ぶたびに基本を忘れがちであることを諭される。まさに洗心道場なのである。

＜表紙・目次へもどる＞